# 音読テキスト「日本の名文」6

## まんようしゅう 万葉集

山上憶良

貧窮問答の歌一首　併せて短歌

風雑り　雨降る夜の
雨雑り　雪降る夜は
術もなく　寒くしあれば
堅塩を　取りつづしろい
糟湯酒　うち啜ろいて
咳かい　鼻びしびしに
しかとあらぬ　髭かき撫でて
我を措きて　人はあらじと
誇ろえど　寒くしあれば
麻衾　引き被り
布肩衣　有りのことごと
服襲えども　寒き夜すらを
我よりも　貧しき人の
父母は　飢え寒からむ
妻子どもは　乞う乞う泣くらむ
この時は　如何にしつつか
汝が世は　渡る
天地は　広しといえど
吾が為は　狭くやなりぬる
日月は　明しといえど
吾が為は　照りや給わぬ
人皆か　吾のみや然る
わくらばに　人とはあるを
人並に　吾も作れるを
綿もなき　布肩衣の　海松の如
わわけ下がれる　襤褸のみ
肩にうち懸け
伏廬の　曲廬の内に
直土に　藁解き敷きて
父母は　枕の方に
妻子どもは　足の方に
囲み居て　憂え吟い
竈には　火気ふき立てず
甑には　蜘蛛の巣懸きて
飯炊く　ことも忘れて
鵠鳥の　呻吟い居るに
いとのきて　短きものを
端截ると　云えるが如く
楚取る　里長が声は
寝屋戸まで　来立ち呼ばいぬ
かくばかり術無きものか
世の中の道

世の中を憂しと恥しと思えども
飛び立ちかねつ鳥にしあらねば

山上憶良頓首謹上す

参考◎ウィキペディア
◎「万葉集1」講談社文庫
◎新潮日本古典集成「万葉集二」
◎鑑賞日本古典文学3「万葉集」

万葉集（まんようしゅう）
七世紀後半～八世紀後半にかけて編まれた現存する日本最古の歌集。天皇、貴族から下級官人、防人、中央から地方まで幅広い人間の歌、約四五〇〇首を集める。

山上憶良は、国司であり、税金を徴収する側の人間であるが、庶民と役人とおぼしき人の問答という巧みな構成で、民衆の苦しみを浮き彫りにしていて、そこには、万葉時代の社会意識、課題意識が象徴的に現れている。壮大な叙景歌もあれば、後の「古今集」「新古今集」につながる、審美的な抒情詩もあり、こうした「貧しさ」を主題とする歌もあって、万葉集が多様な可能性を孕んだ芸術作品であったことがわかる。

（歌の大意）

【問】風交じりの雪が降る夜や、雨交じりの雪の夜などは、どうしようもなく寒いので、堅塩をつまんで、糟湯酒を飲み、咳をし、鼻をすすって、貧弱な髭をかきなでている。自分以外に立派な人間はおるまいと自負して見せるが、寒くて、麻の布団を引き被り、あるだけの布肩衣を重ね着しても、この寒い夜に、私よりも貧しいあなたの父親や母親は、ひもじく寒いことだろう。妻や子どもは、食べ物をせがんで泣いていることだろう。こんなとき、どんなふうにしてあなたはこの世の中を生きているのか？

【答】天と地は広大だというが、なぜ私のためには狭くて生きにくいのか。日月は明るいというが、私のために照ってはくれないのか。誰もがそうなのか、それとも私だけにそうなのか。とりわけ人として生まれてきて、人並みに働いてきたのに。綿の入っていない布肩衣は、海藻のようにぼろぼろとなって破れ下がっていて、ぼろの部分を肩にかけるだけだ。潰れたように傾いた家の中で、地面に藁を敷き詰め、父や母は枕の方に、妻や子どもは足の方に、囲むように寝ている。哀しみ嘆き、かまどには火が入れられず、こしきにクモの巣が張り、飯を蒸すこともできない。とらつぐみのような声でうめき、短い物でも一層端を切り詰めよという諺のように、鞭を片手に税を取り立てようとする里長の怒声が、寝床まで聞こえて来た。こんなにも、どうしようもないものか、この世の中というものは。

そこで次のような歌を作って、身分の高い人に献上申し上げた。

「世の中はつらくて、生きていると身も痩せるほどだと思うのだが、どこかへ飛び立つこともできない、しょせん人間であって、鳥ではないのだから」